BUSINESS
ビジネストーク
TALK

「電力小売り自由化」

頭取　高橋 祥二郎

4月1日から「電力小売りの自由化」がスタートしました。電力の自由化は「発電」「電力小売り」「送・配電」に分類されますが、自由化の最大の眼目は、各家庭がサービス内容や価格を見比べて電力の購入先を自由に選択することができるようになったことです。

さまざまな分野の会社が「新電力」として参入し、電気料金の値下げやポイント付与などサービス内容の充実や環境に配慮した電力の提供により、各社が競い合うことで多様化する個人ニーズに合った対応が期待されるところです。まさに、利用者には選択肢が拡大し、さまざまなメリットを享受できるということです。

電力の安定供給の影では、過去、実に多くの努力と犠牲がはらわれてきました。例えば、電力の鬼・松永安左エ門はGHQや国会の多数意見、世論に抗し、孤立無援で「電力民営化」を主張して実現、日本の復興・発展を確かなものにしたのです。

高度成長期に建設された黒部第4ダムの工事では多くの尊い犠牲者（171名）が出ました。また、発電の火力依存から脱却するために建設された原子力発電所ですが、福島原発事故発生で多くの被災者が出たのは今更ながら断腸の思いであります。原発の再稼働では、妥協のない安全対策が求められるのは当然のことです。

これらの努力と犠牲を見るにつけ、電力の安定供給を図るうえでの「経済合理性」追求と「安心・安全」確保の両立は、悩ましい問題でもあることを痛感します。

このような折、「電力小売りの自由化」がスタートし、私たち消費者にとっては、電力会社を自由に選べることになりました。まさに画期的です。

しかし、電力自由化が先行する諸外国では、停電や電気料金の値上がりなどの問題に直面しているケースもあるようです。私たちは「市場原理」導入に伴うメリットとデメリットを承知しておかなければならないということでしょう。つまり、選んだ〝結果〟を引き受ける自己責任が増した、とも言えます。

普段はスイッチひとつで、空気か水のように使っている電力。今回の「電力自由化」を機に、果たして電力をどう考えるべきか、いかに付き合うべきか、何を最優先にして利用すべきか、など、もう一度考えてみるべき時ではないか。まさに「自由と繁栄」、そして「責任とリスク」の〝古くて新しい問題〟であると認識しています。